YOSHIMOTO TAKAAKI

049

時間 119分
音質 ★★★★★

DISC NO B48-B49

苦難を超える――『ヨブ記』をめぐって

旧約聖書には神話を交えたユダヤ民族の歴史の書である面と、神の予言の書である面と、個人の信仰とか体験とか苦難とかを介して、神と対面する信仰の書という面とがあります。『ヨブ記』はそのなかのひとつだというだけの知識から、先入見なしに、直接読んだらどういうことを感じるか、というところからお話ししたいと思います。

ジャンル	講演日	主催	場所	収載書誌
宗教	1996年1月13日	森集会	芦屋市民センター	春秋社『ほんとうの考え・うその考え』（1997年）

音源について

阪神・淡路大震災の1年後、芦屋市民センターの一室で行われた講演。
音源は主催者提供で、非常にクリア。
書籍『ほんとうの考え・うその考え』には「ヨブの主張――自然・信仰・倫理の対決」として収載されている。

講演内容

01 司会 02:59

01 『ヨブ記』の不可思議

02 『ヨブ記』のテーマ 12:34
『ヨブ記』のヨブという人物は、神と悪魔の談合からめちゃくちゃな試練が下されて、善い行いをした立派な人なんですが、ひどい目にばっかりあうんです。つまり、善い人で善い行いをし、申し分のない人が、どうしてかわからないけれども悪い目にばかりあうのが『ヨブ記』の大きなテーマです。

03 「アジア」と同じ段階の自然観 08:08
ぼくらが「自然」と呼んでいるものは、人間が倫理的に善い行いをしようが悪い行いをしようが、嵐はいっぺんにやってきますし、地震がくればよい人だけは残して悪い人だけ被害を与えるなんてことはない。それと『ヨブ記』の神、つまり自然を造った唯一神は、ほとんど同じなんじゃないかと解釈すると、たいへんよくわかる気がします。

04 『ヨブ記』の概略 12:36
あまりに耐えがたい皮膚病による苦痛と、財産も何もぜんぶなくし、見るかげもなくなった自分を見て、自分の出生を呪うところからヨブの苦悩ははじまるわけです。

02 ヨブの答え

05 「もうたくさん、いつまでも生きていたくない」 09:20
ヨブのいい方は、人間のぎりぎりの不幸とか苦悩とか運命のいたずらとか、そういうものに出会った人間がどうしても吐かざるをえない言葉です。たいへん感銘深いものです。

06 3人の友人とヨブとの問答 10:35
善いことばかりいって自分は正しいと思っている奴は、いまでも満ちみちているわけです。だけど、ほんとうに善いことだと思っているのかを問い直したら、そうじゃないことはたくさんあると思います。それこそが重要なことなんです。自分は少しも傷つかないで善いことばかりいっている奴に対して、あくまでもおまえのはだめなんだということが、現在の課題でもあるわけです。

07 ヨブの言葉の深さ 07:54
神に対しても、友人に対しても、抗議の言葉と呪いの言葉を吐く以外にもう場所がないところで、ヨブは絶望の言葉を吐いています。これは信仰のない者とか薄い者にとっては重要な言葉だと思います。信仰のある人にとっては、この絶望の言葉は、新約聖書の福音書の主人公につながっていくんだという理解になっていくと思います。

03 神の言葉

08 ヨブの苦悩に答えない神 06:07
『ヨブ記』をヨブを中心にして読むとすれば、この神の言葉はとてもつまらなく見えます。何も答えていないじゃないか。自分は天然自然を動かせる全能者だぞという自慢をしているだけで、ヨブの苦悩に対して少しも答えていないじゃないかと思えるわけです。

09 不可解なヨブの和解 08:39
神に対してヨブは、あなたの全能性がよくわかりましたといって、折れて和解しちゃうんです。そこが不可解なところです。どうしてヨブは畏れ入っちゃったのかすこぶるわからないのです。

04 ヨブのなかに見るキルケゴールの「反復」

10 「反復」という概念 06:15
幸福だったのが不幸のどん底に落ちて、さまざまなことが起こり、そしてまた元の幸福のところに戻っていくという、この「反復」の仕方に人間の生き方の典型が見込まれている、というのがキルケゴールの解釈です。

11 キルケゴールの個人的体験 06:40
キルケゴールは、婚約するまでは相手の女の人を口説いて口説いて、それで相手の人が承知して、ほんとうにもう結婚する寸前までいくと、嫌になっちゃうわけです。これ以上親密になって結婚しちゃったら、あとは反復だけしかないと、キルケゴールはそう思えたんだと思います。そういう自分の体験があって、キルケゴールは、自分は間違っていたということと、何が重要なのかということが少しわかったんだと思います。

12 二律背反の彼方にある精神の領域――ヴェーユの考え 06:31
偉大な嵐にぶつかった人であろうと、そうでない人であろうと、そういう人たちの精神の領域のもうひとつ向こうのほうに精神の領域がある。それは無名の精神の領域で、真に偉大なものはそこに精神の置き場所を置く、というふうにシモーヌ・ヴェーユは考えたわけです。

13 試練とは何か――キルケゴールの「試練学」 08:43

キルケゴールは「試練」というものを、試みられたとか、ああひどい目にあったとかという意味あいにとらないで、試練という学問がありうるかどうかという問いにしているわけです。そこがキルケゴールは偉大な人だなとぼくらが思うところです。「試練学」というのを誰かがつくればいいと思います。試練学会というのをです。キルケゴールはそこまでいっちゃうわけです。

14 内村鑑三の偉大さ 06:06

『ヨブ記の研究』もそうですが、この人の書いたものは情念の動きがとても大きいんです。もう仕方がないくらい大きいんです。

15 『ヨブ記』の続編――神とヨブの和解の仕方を書き直す 06:37

自分の最後の倫理観が納得しなかったら、「ここは違う」といいきっちゃったほうがいいと思います。また、そういうふうに自分の心の振る舞い方の輪郭を決めていくのがほんとうだとぼくには思えます。